

1、事前合宿、準備について

直前合宿は、アルビンスポーツパークにて行った。

トレーニングマッチや外部コーチの協力の元、ブリスベンへの出発前に選手同士のコミュニケーションを多く取ることができた。また生活を共にする事で、起床、食事、トレーニング、就寝等、コンディショニングを整え規則正しい生活リズム、またトレーニングに集中できる環境が整えられた。

主務としては、練習時の水や氷の対応、ビデオ、写真撮影、スケジュール管理調整、食事支払いの管理、広報対応を行った。

2、ブリスベンに向けて

選手・スタッフの個人荷物 14 名分と、チーム荷物(ユニフォーム、脱水機、ドリンクパウダー、クーラーボックス、生活備品、トレーニング用品、ボール、ドクターバック、マッサージベット)合計 23 個を持ち、出発した。

荷物には選手が日本フットサルチームの荷物と一目でわかるよう、黄色ガムテープを貼り、移動時に漏れの無いように確認した。

ほとんど時差のない環境だったので、体調不良者は出なかったが、飛行機の中で私物の紛失(Airpods)、またパスポート所在不明の場面があった。



梱包、黄色テープで荷物の受取はスムーズだった

3、ホテルでの生活

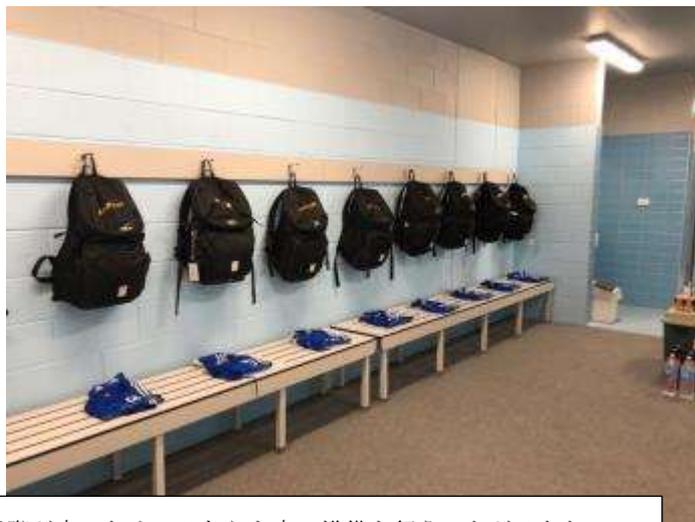
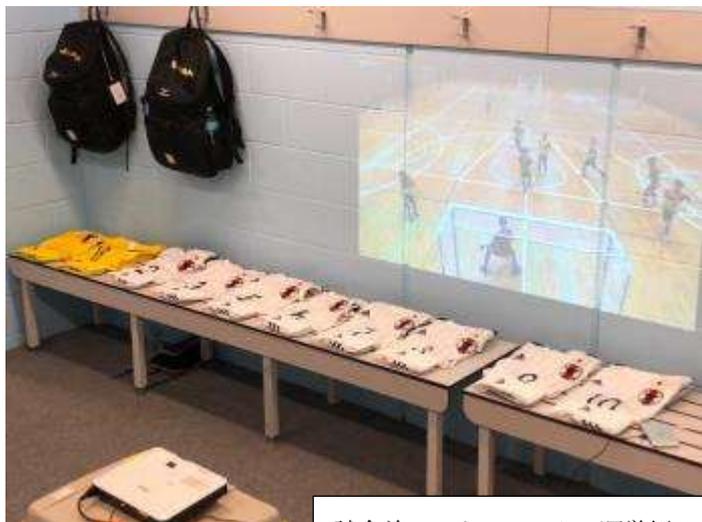
ブリスベンのビジネス中心街のホテルでの滞在となった。

選手は 2 名ずつの部屋割りとなったが、宿泊フロアがバラバラであったため、洗濯や荷物の分担など、LINE を通してのやり取りが不可欠であった。朝食・夕食はホテル内で取れ、スケジュールが組み易く、バイキング形式で、野菜、肉、魚、パン、米、果物、デザートが十分に準備されていた。昼食は、ホテル・試合会場全て、サブウェイであった。アスリートが取る食事として、毎日サブウェイというのは栄養エネルギーとしても不十分だった。当初本部に改善を求めたが、こちらは既に決まった内容であったため変更はされなかった。近くにコンビニやスーパーがあり、トレーニングや試合に必要な補食、水は準備し易く、試合前後の補食について、しっかり準備ができた。また氷はホテルの kitchen で必要な分を都度頂く事ができた。基本的に個別行動はせず、買い物に行く際は、選手達は 2 つのグループで常に点呼を取りながら、行動した。

4、試合会場や現地でのスケジュール

移動は全てバスとなった。準備されたバスは、時間・場所が決まっており概ね時間通りに運行されていた。ホテルから試合会場までは問題なかったが、試合会場からホテルまでは時間帯が合わず、交渉が必要な場面があったが英語堪能な小林コーチのおかげで、事なきを得た。スケジュール、諸連絡は本部からのお知

らせを元に確認し、大きなトラブルはなかった。確認が必要な時はその場で確認する事ができた。
試合会場はロッカールームも清潔で、ピッチ環境も良好であった。水の準備があるとのことだったが、用意されていたのはウォーターサーバーだった。会場には冷水機もあり準備をスムーズに行う事ができた。



試合前ロッカールーム 運営側の手際が良いため、こちらも良い準備を行うことができた。

5、試合時の対応

マッチコーディネーションミーティング、スケジュールの確認、
ビデオ・写真撮影、水、氷の準備、ユニフォーム準備
タイムアウト時補食、水準備
広報活動



AFC 理事が毎日ロッカールームへ スポーツの価値を感じた。



昼食では足りないため、現地調達の前食でカバー

6、主務として

現地では、選手の貴重品管理、鍵の管理、
選手証の管理、
補食準備
本部とのやり取り、
広報活動を主に行っていた。

7、全体を通して

スタッフ：今回は、監督・コーチ・トレーナー・主務の4名であったため、お互いの協力無くしては対応が難しい状況であった。主務で行うべき事もあったが、試合会場では応援にお越しいただく方のサポート、協力無くしては対応できなかった。監督には多くの負担がかかってしまった点が反省点である。

ピッチ内外での主務の配置があったほうが、監督、コーチ、トレーナーはより選手、試合に専念できると感じる。

選手：今回の大会のテーマは自立と自律

かなりの過密スケジュールとなったが、選手達は大きな怪我や疲れを引きずることなく、目の前の試合に全力で取り組む事ができた。ミーティングでも発言が増えていき、ピッチ、ベンチでも互いに声をかけあい、自分たちがどうしたいのか、どうするべきか フットサルに向き合い、考え、取り組む事ができていた。短期間でも大きな成長を感じる事ができた。

しかし、課題も残る。

代表選手として意識して行動できた選手は少ない。洗濯やチームの荷物についても無関心、積極的に対応しない場面も何度もあり、その都度注意が必要だった。言われた先から対応できない、話を聞いていない、等

海外という地にはとても早く馴染めていた。代表チームであるという意識に差があり、プレーにもその点が出ていたように感じた。各国の選手とコミュニケーションを取れたことはとてもよかった点であるが、反省すべき点も多かった。

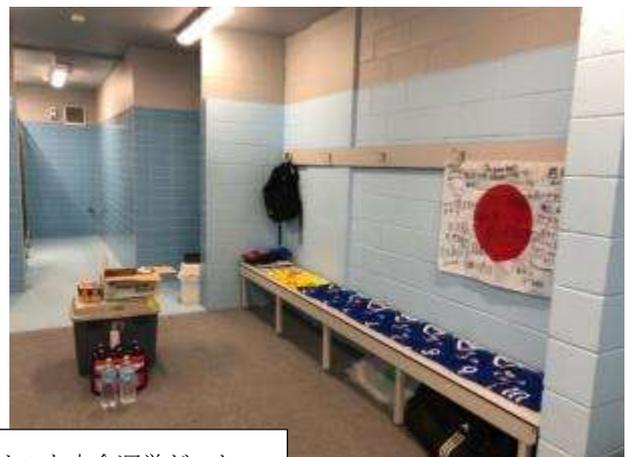
8、課題

選手スタッフ間の信頼関係の構築

スタッフがいければ、気が付かなければ、バレなければ…そう言った行動が目立ったように感じる。競技だけでなく、生活行動面も代表選手としての育成が必要で、スタッフも知識が必要である。

リーダーシップがとれ、周りのことを理解できる選手もいる。

選手の成長を感じることはとても良いことなので、それぞれのできる能力を引き出していけるように、選手のことを理解し一人一人に向きあうことが必要だと感じた。



フットサル担当責任者 非常に友好的かつ、プロフェッショナルな大会運営だった

1. 4年間の取り組み、準備

【2015年～2018年】

「地域セレクション」の実施

選手の発掘、地域でのフットサルへ取り組むきっかけづくり、指導者のつながりを目的に実施。代表スタッフ(フットサル委員会技術委員)が巡回し、知的障がい者サッカーのトレセン地域ごとにフットサルのトレーニングを行った。最終的に日本代表候補選手はラージグループで30名程度となり、そこから本大会に向けて選手の絞込みを行うことができた。

「日本代表候補強化合宿」の実施

年1回、年明けの1月に上記セレクションで発掘した選手を招集し、強化合宿を行ってきた。フットサルに不慣れな選手のサッカースキルをどうフットサルに適応させていくかという観点で行なってきた。年に数回の活動しかないが、4年間積み重ねることで、選手に積みかさなっていくものもある。攻撃、守備、セットプレー、GKの観点で、毎回のトレーニングにテーマを持って積み重ねていった。

【2019年】

本大会への登録

INASの主催する大会には、選手登録が必要である。知的障害があることの証明として、精神科への受診や、様々な書類申請、英語への翻訳等を行う関係で、2019年1月合宿までには大会派遣選手を決定する必要があった。この手続きには選手負担が4~5万円かかる。また、渡航費には連盟の強化費が当てられるが、限りがあるため、選手自己負担を30万円と設定し、その旨も各家庭や保護者に通知、承諾してもらった。総予算の枠から、選手10名、スタッフ4名の派遣人数を決定した。

2. 直前合宿～本大会までの準備

本大会の年は、1月、5月、8月、9月、10月、と5回の合宿を重ねることができた。メンバーも本大会に向けて選考し終わったメンバーだったため、戦術面での落とし込み、フットサルの技術向上に務めた。前回大会からの分析を行い、日本の長所を生かし、相手の長所を防ぐことができるようなトレーニングを行った。特に守備面でのチーム戦術が理解され、良い守備から良い攻撃への移行に向上が見られた。コンディショニングの面では、yo-yoテスト(間欠性回復力テストレベル1)を実施し、能力を数値化し、地元でのトレーニング強度の向上を促した。



Yo-Yo テストは間欠性回復力テストレベル1を実施 所要時間は20~30分程度

最高スコアでも一般の平均値程度であったのは残念だが、一つの指標となり、地元でのトレーニングを怠らなかつた

ミーティングでは、世界大会初参加の選手が多かったため、映像中心とし、前回大会経験選手からの話を多くし、世界の基準を伝えていった。また、選手自身からの発言、選手同士で話し合う機会、時間をしっかりと確保した。課題として、話すことはできるようになったが、相手の話を「聴く」という力はもっと伸ばすべきである。言いたいことは言うが、相手の発言に対して深めたり、広げたりキャッチボールになることが少ない。

また、10月合宿に持ち込みの怪我が4名おり、コンディション面での不安も大きかった。原因としては、大会が近づき、自チームでも強度を上げたためと推測される。島田トレーナーのおかげで、回復に向かったが、大会前だけでなく「日常のトレーニング強度」という点を見直していかなければならない。とくに知的障がい者サッカー、フットサルの分野では、この環境を整えるにはスタッフの介入も不可欠であると感じている。



3. 本大会について

オフザピッチについて

試合に関しては準備が全てであるといってきたことから、「直前合宿までの成果を発揮する」、「選手のモチベーションを整える」ことに注力した。現地での環境については、これまで経験したサッカー、フットサルのどの大会よりも素晴らしく（豪華すぎず、簡素すぎない）、気候、周辺環境、治安も含めて、街中をあげて良い環境が整っていた。

また、日本人として礼儀正しく、フレンドリーに関わることで、ホテル、大会関係者、他国のチームとも良い関係を築けていたと感じている。その中でも、今回は小林コーチが英語に堪能ということで、折衝や要求などの面においても、非常に活躍してくれた。通訳をつけるということも手段の一つだが、そういった人材と繋がる、見つけることも世界大会では重要である。



スコアとピッチを同時に撮影 分析に最適

清潔なトイレ ホテルもどこもキレイだった



会場は有料チケット、売店もある

オンザピッチについて

今回の日本代表の長所は、「良い守備からのカウンター」であった。前回大会から分析し、作成したプレーモデルを、体現できていた。また、相手がプレスに来たら回避する、サイドを突破したらファーサイドに詰めるといった引き出しは、4年前よりも増やすことができた。しかしながら、結果として失点が多く、勝ち点3しか得られなかったことは、受け止めなければならない。具体的には以下の改善点をあげる。

〈攻撃〉

・コントロールオリエンタード（意図的なボールコントロール）

プレス強度が強く、リーチの長い相手に対して、ボールを止めた瞬間を狙われる。1stタッチを足裏で動かす（出る、引く、なめる）習慣を身につける。

・フィニッシュ

今大会はミドルシュートも決まっていた。これは、世界のゴレイロの技術がフットサルに適應していないため、コースを防ぐには不十分であるからである。特に、ゴール近くで上を狙えると、得点の確率が上がる。また、ファーポストで速いボールを正確に合わせる技術も向上したい。

・前線でのタメ

プレス回避、攻撃の崩しのためにはピボが相手を背負ってプレーする必要があるが、大会では最後までピボが定まらなかった。自分が受けるという意味、身体の使い方、ボールの置き所、ピボは特殊なため、個別のトレーニングも必要である。



体の大きなゴレイロに対して、上のコースを狙う



張りボールのような試合球 世界大会ではよくある
どんなボールでも適應しなければならない

〈守備〉

・1 vs 1 の守備

トレーニングから「ボールを奪う守備」を意識させたが、試合では相手の技術、フィジカルの前に消極的な場面もあった。それでも奪いに行く姿勢を見せた方が相手も嫌がり、ミスも増えることを認識させると、積極的な姿勢に改善していった。細かい部分で、相手に正対した足で奪いに行く、利き足を意識する、シュートに対して背を向けない、スライディングでブロックするというフットサル特有の細かい点も向上していかないと、失点は減っていかない。

・守備の連動、連携

基本のライン設定はハーフラインとしたが、試合展開によって、前線からのプレス、第2PKラインまで引くこともトレーニングしてきた。試合中、選手がボール周囲の状況を感じ取ってプレーすることと、強力なリーダーシップを取れる選手を育てる必要がある。

- ・ゴレイロを中心とした守備

ゴレイロの2名は日常から健常者のチーム（関西2部、東京都1部）に所属しており、非常に良い関係を作り上げてきた。結果的な失点数は多いが、被シュートの数を考えると力を発揮していたし、今後もゴレイロを中心とした守備を構築していくことが日本の生命線となる。



〈セットプレー、特殊局面〉

- ・サインプレー、ブロックの技術

参加国の多くがサッカーチームということから、日本のデザインされたセットプレーはチャンスを作り出せていた。特にマンツーマンのチームはブロックに対して対応できていない。日本はこのブロックを生かすために、誰が、どの選手をブロックするとフリーが生まれるかという点まで決め事ではなく、選手が判断できるようにトレーニングしていくことが大切である。

- ・特殊局面について

フットサル特有の、退場（5 v s 4 の状況が2分間続く）、第2PK（チームファウル5つ目以降のファウル）、パワープレー（GKが相手陣に入って数的有利でプレーする）、については、トレーニングでも短い時間で行なっていたが、やはり大会中も起こった。経験値が少ない中で、必ずトレーニングしておく、決まり事を明確にしておく必要がある。

4. 4年後に向けて

- ・選手育成について

選手は合宿を重ねるたびにフットサルに対して成長、適応していくのを見ることができた。選手が夢、目標を持って取り組むことこそが、一番の成長につながると感じている。これからも現場を周り、指導者の方と繋がり、可能性のある選手を発掘していき、挑戦する場所を用意していきたい。そして、めまぐるしくスピーディーに展開されるフットサルでは、オフザピッチでも自立、協力、決断力を磨いていくことがゲームにも影響する。生活面の報告書にもあるが、各地域でもオフザピッチの重要性を声を大にして伝えてほしい。



・指導者養成

監督として、前回大会から初めて4年間のサイクルを経験し、いかに日常のプレー環境が大切かということを感じた。合宿で成長したものの、残念なことに期間が空くと元に戻ってしまうことも見られる。選手自身の意識向上はもちろんのこと、JFAでも発信されているように「日常を変える」努力を地元の指導者の力を借りながら、続けていかななくてはならない。

また、代表スタッフ自身の能力向上として、JFAライセンス取得の義務化、スタッフの公募、障害特性の理解といったことも発信していきたいと考えている。

・フットサル委員会として

連盟組織の中に位置づけられていることで、サッカー関係者と協力して事業を行うことができています。その中で、やはり各地域のフットサル担当者を明確にし、窓口として機能してもらうとともに、各地域でのフットサルへの取り組みをまとめ、有効活用していく。近い将来、フットサルの地域対抗戦、チャンピオンシップという形で実施することで、目指すべき大会ができ、日頃からフットサルに取り組む循環を作り出していきたい。

5. まとめ

2015年の日本代表結成から、初めて4年のサイクルを終え、様々な方のご支援、御協力を感じながら、今大会を迎えることができました。新しい選手や指導者と出会い、一步一步、成長を実感し、選手が変わっていく様子を間近で見ることができたことは、監督として嬉しい限りです。その陰には、学校や職場の理解、身近な指導者の日々の努力、保護者の献身的なサポートがあったことに思いを馳せます。本当にありがとうございます。

世界大会は結果を求め、真剣勝負する場です。チームとして前回を超える結果が出せなかったことは非常に悔しいですが、大会が終わった今、日本チームの成長が見られ、世界との差を埋めていくことには悲壮感よりも、楽しみが大きくなっています。

連盟のビジョンにあるように、サッカーに続き、フットサルも「三位一体+普及」の事業がようやく確立してきました。地域の力、日本の力を結集しながら、歩みを止めずに進んでいくのみです。これからも、皆様の力強い御協力、御支援をいただきながら、次の4年に向けて後押ししていきたいと思っております。ありがとうございました。



知的障がい者フットサル日本代表
INAS GLOBAL GAMES 2019 ブリスベン トレーナー報告

2019.10.5 ～10.9(直前合宿)10.10 ～ 10.20(本大会).

作成者：島田 靖丈 (トレーナー)

※今回の直前合宿、本大会での外傷・障害は別紙参照

1、外傷報告：

今大会で大きな外傷（骨折・脱臼等）はみられず、選手10人全員が全ての試合に登録、出場出来たという事はトレーナーとして最も嬉しい結果であった。大会期間中では、参加国中で唯一5日間連続試合というハードな日程になり、フィジカル的に非常に屈強な外国人選手との試合で打撲や疲労を含めて筋肉的な問題があったことは否めなかった。



1 試合 4-5 人のテーピング



ストレッチの重要性を繰り返し伝えた

2、コンディショニング報告：

コンディショニング面では主に「ドーピング検査について」と「飛行機内での過ごし方」を中心に8月、9月の合宿と直前合宿で確認した。特に「ドーピング」については薬を常用している選手は少なかったが、目薬や塗布する薬なども引っかけられる可能性があるため常用している物は日々変化する可能性があるため、禁止物に含まれないか専門家のスポーツファーマシストの方と連絡を取り合い確認を行った。また、カフェインを多く含む飲み物であるエナジードリンクやコーヒーなどを含めて、試合前に飲まないように日頃から注意するように何度も伝えた。どうしても使わなければならない物に関しては必ず連絡するように言ってきた。しかしながら、9月の合宿や直前合宿でケガに対する痛み止めの薬を連絡せずに隠れて飲んでいたり、塗布していたのがわかり、私自身の伝え方に問題があったと反省するとともに、今後世界大会ではドーピング検査は当たり前に行われるので、各地域の指導者の方々やご家族などの選手の身の回りの方々にも注意をしていただく必要があると感じた。

体調面では、前回大会でも行った東洋医学的な健康診断を測定する機会を用いて合宿や飛行機の前や後など、数回行い体調の変化や疲労度などに気を配った。結果、緊張からくる精神的な下痢のような症状が出た選手はいたものの、他競技の日本選手団で多く出ていた様な発熱等の体調を崩す選手は、フットサルチームで一人も出なかったのは誇らしい事であった。

3、総括：

前回大会から2大会連続で世界大会に帯同させてもらい、強化合宿を含めた活動を通して感じた事は、海外の選手に比べて日本の選手は、年齢的にも非常に若く、一生懸命取り組むが、メンタル的にまだまだ未熟で波があると感じた。大会期間中はトレーナールームを木村監督の配慮で充実した環境にしてもらった。選手各々で精神的に非常に繊細なので、言葉かけ一つにもかなり注意をしながらコミュニケーションを取るように心掛けた。これは木村監督をはじめ、小林コーチ、柳沢主務が注意する役割に回って、私自身は選手の癒し役に回るような役割設定をチームスタッフで話し合いやらせてもらった。そのおかげで選手にとっては連戦とホテルでの暮らしで疲労がかなり溜まっていたと思われるが、リフレッシュの場になっていたと感じた。

フィジカル面では柔軟性、リズム感、バランス能力が悪く、屈強な海外の選手を相手にすると、大きな差となり、球際のあと一歩やあと数センチの差がサッカーに比べて狭いコートやゴールのフットサルにおいて非常に大事であると感じた。実際にスライディングができない選手や、相手に寄せることはできてもしっかり止まる事ができずに、かわされてしまう選手がいたのは、失点が多くなった原因の一つであると感じた。

4年以上この活動に関わらせてもらい常にストレッチを含めたトレーニングやケアの重要性を選手には伝えてきたが、習慣にして継続している選手は数名で、意識の差はもちろんあるが、まだまだ足りないと感じるので、ドーピングの件も含めて私自身の伝え方も、もう一度見直さなければならぬと感じたと同時に各地域の指導者の方々や家族を含めて、選手の周りの方々の協力も必要不可欠であると感じた。

今回世界大会にサッカーを含めて初めて出場する選手がほとんどだったので、今後は精神的に大人になった選手達が、今回の大会の経験を次回の大会までに継続して各地域の選手の手本となる様な人間に成長し、引っ張って行って欲しいと願う。実際前回の大会を経験している2名の選手は、今回チームを引っ張っていたし、プレー面でも活躍し、世界でも十分戦えていた。その2人にプラスしてより多くの若い選手たちが継続して代表選手に選ばれ続けてくれれば、きっと世界の頂点を取れるチームになると感じた。



1 日時

事前合宿 : 2019年10月05日(土)～10月09日(水)

INAS Global Games : 2019年10月10日(木)～10月20日(日)

2 場所

事前合宿 : アルビンスポーツパーク

INAS Global Games : オーストラリア ブリスベン近郊

3 事前合宿について

事前合宿は千葉県長生郡にてサポートコーチの方々に協力を頂き、トレーニングを行った。トレーニングについては、パデル&フットサル 晴れのち晴れ、アルビンスポーツパーク内体育館と全日室内で充実したトレーニングを実施出来た。またブリスベンへ行く前には、大会に向けた選手間のより一層の一体感促進の為、朝の散歩や体操、食事の時間、宿舎でのミーティング時にコミュニケーションを促し、出発時には全員が、大会に向けてモチベーションを上げる環境を作る事が出来た。



毎日欠かさず散歩

4 ブリスベンについて

ブリスベンは、オーストラリア連邦クイーンズランド州南東部(サウス・イースト・クイーンズランド地域)に位置する州都で、面積4673.2平方キロメートル、人口約223万8千人と、シドニー、メルボルンに次ぐオーストラリア第三の都市であり、オセアニア有数の世界都市である。この時期は日本と季節は逆の初春となり、非常に過ごしやすい季節で体調管理のしやすい気候であった。宿泊場所は、ビジネス街に位置し、有名なクイーンズストリートモール等を有し、買い物にも困らず基本的には不自由の無い生活を送る事が出来た。



ブリスベンは自然と近代的な建物が融合した街



ランニングコースにも困らなかった

5 ブリスベンまでの移手段・時間

成田空港（日本時刻19時20分出発）から、シドニー国際空港で乗り継ぎ、ブリスベン空港に向かった。ブリスベン空港から、リムジンバスで片道凡そ1時間かけてブリスベンのホテルに到着（現地時刻昼11時頃に到着）。出国してから約12時間程（時差2時間）かけてのブリスベン入りとなった。

6 ホテルでの生活

Mercure Hotel Brisbane に宿泊した。当ホテルは2人部屋であり、選手も終始リラックスできているように感じられた。ホテルにはFREE Wi-Fi が完備されており、機内モードにした上で、使用していた。（一部選手はWi-Fi を持参。） 諸連絡に関しても、口頭だけではなく、グループ Line を作ることで、念入りに確認することが出来た。当初懸念していた洗濯については、国内から脱水機を持参し備えたが、ホテル内に洗濯機、脱水機が備え付けてあり、選手達は自主的に洗濯する姿勢が見られた。また、ウェアの管理は入念に実施し、返却時にはサイズ、枚数を自ら監督コーチの前で確認し、「自立、自律」を意識した行動が出来ていた。但し、一部選手がショートパンツを紛失し、スタッフ、選手全員でくまなく探したが、見つける事が出来なかった。

ホテルの食事は主に朝食、夕食であったが、バイキング形式で食事のメニューも肉、魚、野菜、米とバランス良く食事を摂る事が出来た。但し、昼食は毎日 Subway のサンドイッチとなり、選手間でも飽きと栄養の偏りがあり、昼食後の試合に向けては十分な栄養補給は困難であったが、コンビニやスーパーでバナナやゼリー等の捕食を準備し試合に向けて体調管理に努められた。

早朝の散歩については、快適な気温であり身体を起こす為に、ブリスベンの街並みを楽しみながら実施出来た。



ホテルでの食事は副菜が4～5種類のバイキング



ホテルは清潔でセキュリティーも○

7 外出

遠征中の主な観光は大会後のブリスベン市街の観光であり、選手の希望で二手に分かれて、観光した。コアラやカンガルーとの触れ合いチームと、人工ビーチ散策チームで思い思いの時間を過ごし、日本では経験出来ない時間を過ごせた事は選手達にとって貴重な経験になったと思われる。また、買い物につ

いては、選手達に集合時間だけを伝え自主的に行動させたが、時間を遵守し、決められた額面で買い物を楽しめていた。全体的に異文化に触れ、海外での生活を肌身で感じる事が出来た為、大会と共に海外で充実した時間を過ごせた。

8 全体を通して

今回オフザピッチで特に課題に感じたのが、

- ① エレベータで荷物を持ち忘れスタッフ、一部選手が対応
- ② ビブスの枚数が足りないとチームで探しているのに対し自分で持っているのにも関わらず連絡しない
- ③ チームから借りているショートパンツの紛失
- ④ 序盤洗濯を一部選手に任せていた（後にチームで話し合い、分担を決めて自主的に実施した）

である。選手の中でも「自立、自律」の意識にばらつきがあり、「やれることをやらない、無責任で他人任せな行動」は、今後の代表活動での課題となった。

8 強化遠征におけるオフザピッチ面での成果と課題

【成果】

- 異文化コミュニケーション（積極的な現地の人達とのコミュニケーション）
- 選手・スタッフ間のコミュニケーション
（悪い事を指摘し、困った時にはスタッフへ相談出来る関係）
- 物品の管理に対するルール決めと実行（ウェア、パスポート、ルームキー等）

【課題】

- やれることをやらない、無責任で他人任せな行動



オフザピッチの姿勢がピッチにも表れる



現地に駆け付けてくれた保護者サポーター

・目的

INAS Global games 本番に向け、事前合宿で最終調整を行い、本大会では GK がチームを助け、勝利に導く事を目的に、技術面、精神面でのサポートを行った。

1. セービング 2. スローイング 3. コーチング

・成果と課題

セービング:

本大会で一番4年間の成果が出たのがセービングである。本大会の参加7か国の中でもフットサルの GK としてのセービング技術は野崎、岡本共トップクラスであり、チームのピンチを幾度となく救った。課題としていたミドルレンジからシュートを弾き切る事が出来なかった事や、ファーポストへのシュートに対するアプローチは、見違える程改善されており、観客を唸らせていた。また夏合宿にてブラインドからのシュートに課題が顕在化した為、対策として地面に手を付き、足の間からボールを見失わない様に見るポジションを急遽練習に織り込んだが、本大会で即体现し、難しいブラインドのシュートについても対応出来ていた。失点は多くしたものの、GK としては難しい場面も多々あり、GK コーチとして、4年間で習得したレベルでは、十分満足出来る内容だと思われた。但し、難しい失点でも GK が止めなければチームは勝てない為、今後はもう一段階厳しいレベルを要求する必要がある。彼らもそれに耐える技術、メンタリティをこの4年間、本大会で養えたので、次の4年後に向けて飛躍的に成長出来る様に教えていきたい。

・スローイング

大会では、相手の体格の大きさや強さ、オフェンスへのプレッシャーの強さから、チームとして GK から相手陣地へスローイングが効果的と判断し、クリアランスやカウンターの場合で多用する事になった。実際には得点に繋がるプレーもあり、ゴールを守るだけではなく、オフェンスへも貢献出来たと思われる。但し、スローイングの技術で野崎、岡本に差が出た為、出場時間を大きく分ける結果となった。野崎はフットサル経験も岡本よりも長く、スローイングが武器になっていたが、経験の浅い岡本はディフェンスに引っかかる場面や、ピッチの外に出てしまう場面が多く、チャンスを作れなかった。フットサルの GK のスローイングは、フィードの精度、状況判断が非常に重要になる為、今後改善と、より一層の練習の積み上げが必要になる。投げ方については2人共理解はしている為、今後の反復練習と経験で二人は大幅に成長出来ると考えられる。



岡本選手



野崎選手

・コーチング

コーチングについては会場の大きさからフィールドプレイヤーに通りづらい状況だったにも関わらず、2人共声が枯れるまで必死に指示が出来ていた。但し、チームを叱咤激励、鼓舞する事も大事だが、冷静に正確に伝えなければいけない場面で、言葉を連呼してしまう事で、情報過多になり分かり難くなり、フィールドプレイヤーに理解して貰えない場面があった。状況判断を的確にし、正確に伝える事も経験しなければ一朝一夕で出来る技術ではないので、4年間だけでは彼らにはまだ足りなかった。但し二人の声質自体は通り易く、フィールドプレイヤーには伝わっている為、試合経験を積み、コーチからも指示のポイントを適宜伝える事で改善を図りたい。コーチングのもう一つの側面として、チームを鼓舞しメンタル面でサポートした点でも、二人は大きく貢献出来たと思われる。常に声を掛け続ける姿勢は、この4年間で大きく変わったポイントの一つである為、継続して貰いたい。

・個別の成果と課題

【野崎】キャプテンとして、チームを引っ張り、セービング、スローイング、コーチング、メンタル面の全てで高い水準でプレーした。これはチームメイト・スタッフからの本大会の MVP に選出される結果で証明されている。地元の社会人チームへ所属する事で、高い意識を以て練習に取り組めた事が、技術力への大きな自信となり、プレーに繋がったと思われる。真面目で練習に真摯に取り組む性格も成長に大きく影響している。まだ経験は少ないが、年齢も若く体力的にもこれから充実出来る為、社会人チームでもコーチと共に経験を積んで、社会人チームでも自信を持ってプレー出来る様になれば、飛躍的な成長が見込まれる。今後も細やかに指導していきたい。

【岡本】4年間での成長率は、チーム全体でもナンバーワンだと個人的に思う。当初は体格、柔軟性には恵まれていたが、メンタルが弱く、技術の水準も決して高くは無かった。しかし、持ち前の負けん気の強さと真面目な性格と、ポテンシャルが飛躍的に成長させたと考えられる。特にセービングの成長は著しく、セービングの技術力は野崎を凌いでいた。メンタル面も非常に強くなり、失点の場面でも心折れる事無く、強い精神力でゴールを守っていた。今後も GK の知識や経験を突き詰め、GK として成長して貰いたい。

<総括>

本大会は2人の活躍は、4年間の短い期間の成長という視点で、本当に満足している。今後2人には継続して競い合い、日本のフットサル GK の技術の高さを証明し続けてもらいたい。失点を知らない GK は良い GK とは言えない。失点の仕方を知っている GKこそ、それを防ぐ術を身に付ける資格を持っているからだ。本大会での失点は2人を大きく成長させると思われる。今後も自分の知識、経験を全て伝え、全力で GK をサポートしていきたい。

